

障害者の権利を守り、発達を保障するために

みんなのねがい

10
2025
No.720



特集

ことばと発達

話しことばにつながる育ち 松田千都

吃音のある子どもたちの理解と支援 小林宏明

連載

実践にいかす障害と医療

土岐篤史

- 1 人として 池田倫子
- 2 【インタビュー】いま語りたい 心の窓を広げて 有原誠治
- 4 教員のはじめの一步 木澤愛子
- 6 心に種をまく 安田菜津紀
- 7 あなたに届けたいこの一冊 横内弥生
- 8 この子と歩む 江見敏恵
- 11 進め！ 推し活道 千葉真実
- 12 息子と歩く 千葉桜 洋

みんなの ねがい

2025年10月号
No.720

特集 ことばと発達

- 14 ことばや見通しの力が自分への自信につながっていく 藤村純子
- 16 自閉症の子ども「ひとりごと」 末長詩織
- 18 「ことばの心配」を入口として、
子どもの発達をまるごととらえる 吉田文子
- 20 話しことばにつながる育ち 松田千都
- 24 吃音のある子どもたちの理解と支援 小林宏明



- 26 私ときょうだい 安田美咲
- 28 子どものミカタ 竹脇真悟
- 30 ソーシャルワークってなんだろう？ 木全和巳
- 34 シリーズ 18歳 福本直美
- 36 暮らしの場は今 富永安理沙
- 38 実践にいかす障害と医療 土岐篤史
- 40 ニュースナビ 基本合意15年 蘭部英夫
- 42 実践の魅力 河口泰孝
- 45 全障研の支部ニュース、紹介します 辻 恭子
- 46 全障研第59回全国大会報告
- 48 BOOK／編集後記

裏表紙 おいしいひととき 松村理香

デザイン・イラスト

うじたなおき、勝倉大和、ちばかおり
永野徹子、日本印刷、橋野桃子、山内若菜

表紙のことば

日本海沿いの鄙びた漁村。夕暮れ時は人影も無く静まり返っている。ぶらぶらと散策していると、ひとりの漁師が声をかけてきた。こんなところでカメラを下げて歩いているのが珍しいのだろうか。

俺なんか撮っても絵にならんよ、と照れながらも撮影に付き合ってくれる。漁師はずっと穏やかに笑っていた。

この小さな漁村で彼は今までどんな人生を送ってきたのだろう。

ひとは顔じゃなく、顔つきが大事だと思っている。そして歩んできた人生がそのひとの顔つきをつくる。

僕も彼と同じくらいの歳になったとき、こんな笑顔でいれるよう生きていこう。



表紙=土佐和史

とさ かずふみ／写真家。1977年大阪府生まれ。全国各地に出向き、旅ゆく道で出会ったひとや風景を撮り続け作品発表を行っている。2018年に写真集出版レーベルBUFFALO PRESSを立ち上げる。写真集に、「SUNLIGHT MEMORIES」(CITYRAT press)「北関東」「路地裏に咲いた花」(いずれもBUFFALO PRESS)がある。

いま語りたい 心の窓を広げて



アニメーション監督 **有原誠治**さん

ありはら せいじ／1948年、秋田県生まれ。アニメーション監督。Aプロダクションを経て虫プロダクションに在籍。同社退社後はフリーとなり、ドキュメンタリー作品の撮影や監督を務める。主な作品に「うしろの正面だあれ」、「つるにのって」など。近年の作品に実写ドキュメンタリー映画「声をあげる高校生たち〜核兵器禁止条約に署名・批准を〜」がある

アニメーションとの出会い

私は秋田県南部に位置する羽後町ごまちの山間の家で生まれ育ちました。父の趣味で床の間には書や絵が飾られていて、小さい頃からそれらを見ては真似て描いていました。親たちには描いた絵を褒められて、絵を描くことが好きだった子ども時代でした。高校に入っても絵を描き続けなかったのですが、進学した高校には美術部はなく、美術の先生もいませんでした。そこで先生たちが相談して、隣の湯沢市にある女子高の美術部に通えるようにしてくれました。朝、自宅から羽後町にある高校まで7kmほど自転車に乗って登校し、午後になったらそこからまた8kmほど自転車に乗って女子高に行くんです。途中たいへんな峠道を越えないといけなかったのですが、そんなことは全然苦にならず毎日が楽しくてしょうがなくなかったですね。子どもの期待に応えてくれる先生方がいたこ

とに本当に感謝しています。

高校卒業後は上京してデザイン系の専門学校に入り、仕事を探すなかでアニメーションの世界に出会いました。そして新聞の求人広告で見つけたのが当時『オバケのQ太郎』の作画をしていたAプロダクションでした。実技試験の後の面接で、最後に私からお給料について質問したんです。そしたら初任給が当時アルバイトをしていた会社の3分の1ぐらいの金額で、もうびつくりして、「それじゃとてもやっていけません」と言うて面接は終わりました。

そんなことも言うてしまったし、これは採用されないだろうな、他の仕事を探さないと考えていたところにAプロダクションから採用通知が届いたんです。それでおもしろいところだなあと感じてそこで働くことを決めました。迷いはなかったですね。

作品に込められているもの

特集

ことばと発達

学校や福祉など、実践現場の中では、本人のことばの背景にある思いやねがいが十分に受けとめられなかったり、表出されることばがたくさんあっても、必ずしもその人の本当に伝えたいことの表現にはなっていなかったりすることはないでしょうか。

また、子どもの「ことばが出ない」「ことばが広がらない」といった保護者のみなさんの悩みもよく聞かれます。

ことばとはなんでしょうか。ことばが育つとはどういうことでしょうか。

今回の特集では、障害のある人たち・子どもたちのことばをていねいに受けとめ、内面や感情をじっくり育む実践報告を通して、ことばのとらえ方やことばを育むうえで大切にしたいことを考えていきたいと思います。

「ことばの心配」を入り口として、 子どもの発達をまるごととらえる

～相談支援の現場から



東京 東久留米市児童発達支援センターわかさ学園発達相談室

吉田文子

私は、児童発達支援センターの相談支援部門で相談支援専門員として主に計画相談、一般相談、巡回相談を行っています。保護者から、お子さんの心配や困り事について電話があると、どのような心配や困り事があるのかを聞きます。相談の希望がある場合は一般相談として受け付けて、日程調整をした上でお子さんと来所してもらいます。相談は保護者のお話をうかがう職員と、お子さんと遊びながらお子さんの様子を観察する職員二人一組で行います。

「ことばが増えない」

Bくんの保護者の心配は「ことばが増えない」でした。Bくんは2歳6ヵ月。ことばが始めたのは1歳過ぎで、1歳半健診では特に問題はなく、家族も心配に思うことはなかったそうです。2歳2ヵ月で保育園に入園しました。入園してから同じ月齢の子のおしゃべりを聞いて「うちの子、単語しか言えない、ことばが増えてない」と不安に思うようになってきました。保育園の先生からも、困っていることを訴えないのでイライラしている様子があるということも聞きました。市の2歳児歯科健診で保健師に相談

したところ「心配ならこども相談を受けましょう」と勧められました。こども相談では心理士から「心配ないように思うが継続して相談していきましょう」と言われたそうです。

Bくんの様子

来所したBくんは、お父さん、お母さんの陰に隠れてこちらをうかがっています。保護者と離れられない様子だったので、保育室で相談を受けることにしました。

Bくんははじめに目に入ったコインを入れるおもちゃで遊びはじめました。コインを入れて、レバーを引くと入れたコインが出てくる仕組みもすぐに理解して楽しんでいました。コインの入れ口が複数あるのに1ヵ所の入れ口にしか入れないので「こっちもあるよ」と示してみましたが、それには反応しないで同じ入れ口から入れることを続けていました。リラックスしてくると「ガッチャーン」とことばも出てきました。「ガッチャーン」って音がするね」と相槌を打つと（上手でしょ！）と言わんばかりの笑顔で私を見返してくれます。時々「赤」「青」と、コインの色を正確に言うこともあります。

話しことばにつながる育ち

京都文教短期大学

松田千都



はじめに

保育園の園庭で、1歳の子どもたちと遊んでいた時の出来事を紹介します。

門のそばにいたゆらくん（1歳10か月）が、「こわーい！こわーい！」と言いながら、おびえた表情で私の方に近づいてきました。見ると、「クー、クー」と鳴きながら歩いて門から入ってくる4羽のハト。身長80cmほどのゆらくんには、大人にとつての大型犬くらいに見えたのかもしれませんが。私は「ポッポだよ、怖くないよ」と伝えましたが、ゆらくんはビシッと腕を伸ばしてハトを指さし、「ぎゃーっ！ポッポー！」と叫びました。その声を聞いたさきちゃん（1歳8か月）も、「あーっ！ポッポー！」と大声を上げ、ハトに向かって深々とお辞儀をしました。

数分後、勇気を出したゆらくんが小走りで近づくと、4羽

が一斉に飛び立ちました。バサバサツという羽音やすばやい動きに驚いたゆらくんは、「うわーっ！ポッポー！」とハトをまた指さして私の方を振り返りました。私は「ポッポ飛んだなあ、行ってしまったなあ」と答え、子どもたちと一緒にハトが飛んで行った空を見つめていました。

ゆらくんとさきちゃんが発した「ポッポ」は、形式的にはたった一語の名詞です。けれども私には、「ポッポが歩いてきた！」「大きいポッポが怖い！」「ポッポが飛んでびっくりした！」と、2人が懸命に訴えているように感じられました。「ポッポ」という発語だけでなく、声の大きさやトーン、視線や表情、動作や身振りなどにも、2人の心の動きや私に伝えたい思いが表れていたからだと思います。

子どもたちに話しことばが生まれてくるのは1歳頃のことです。「ポッポ」のような一語発話は、一語がさまざまな意味に用いられて文のような役割を果たすことから一語文とも

呼ばれますが、この一語文が豊かな内容を伴うためには前言語期の発達が大きな役割を果たしています。ここでは乳児期後半（6か月頃から1歳前半の時期）を中心に、その特徴を述べていきます。

ことばの聴きとりと構音の発達

大人の「ポッポだよ」という発話から「ポッポ」という語を学ぶためには、発話の中の「ポッポ」という音のかたまりを聴きとる必要があります。1歳頃までには、いつも同じ順序でつながって出てくる音のかたまり（単語）を聴きとることができるようになります。

また、「ポッポ」と言うためには、唇や舌の動きをコントロールして音声を出すことができません。乳児期後半には構音器官の発達が進み、単発でいろいろな音を出すだけではなく、ちがう音をつなげて発することができるようになっていきます。また、長く話すためには、子音と母音が含まれる音をつなげて速く発することが欠かせません。7〜8か月頃には、「bababa」のように子音と母音で構成される複数音節からなる規準喃語（反復喃語）がみられます。これは、子どもが自分の声を聞きながら声の出し方をコントロールしている姿もとらえられます。

0歳の終わり頃には、喃語に含まれる音を会話のような調子でつなげるジャーゴンがみられます。1歳頃には、意味的な母国語の発音が特定の内容と結びついた発語（例 マンマ＝食べ物や母親）が出現します。初語（初めての有意意味な発

語）が現れるまで、子ども自身がことばを使ってやりとりをすることはできません。けれども、生まれた時から、心ももち何かを伝えようとしている存在として受けとめられ、まわりの世界と豊かな関わりをもちながら生活する中で、子どもは音声と意味のつながりを学び、自分の思いを他者と通わせる喜びを感じていくのです。

指さしの発達と、ことばとのつながり

先ほど述べたように、ゆらくんとさきちゃんとは、ことば以外にもさまざまな手段によって何かを伝えようとしていました。それは前言語期から育まれてきた大切な力であり、乳児期後半には大きな変化がみられます。

まず、指さしに注目してみましょう。ゆらくんは、「ポッポー！」と叫びながらハトへの指さしをしていました。その指さしには、「怖いのはあれだ！」と、ゆらくんが見ているハトに私の視線を向けさせる働きがありました。それによってゆらくんと私はハトへの注意を共有でき、ハトに対する怖さを共有することもできたのです。

対象への注意を他者と共有することは共同注意と呼ばれ、それによって「自分―対象―他者」の3つを結ぶ三項関係の成立したやりとりが可能になります。私たちがおしゃべりをする場面を思い浮かべてみると、お互いが特定の話題への意識を共有することによって会話が成立していることがわかります。その原型がすでに乳児期後半に育っているのです。

9か月頃には、散歩中に大人が「タンポポが咲いてるよ」



第7回 子どもらしさを求めて 「くだらなさ」を楽しむ

この連載では、さまざまな実践者がそれぞれの実践を通して、子どもの発達や魅力について語ります。



日本福祉大学 竹脇真悟

私は肢体不自由特別支援学校の小学部高学年（小高）の障害の重い子どもたちを主に担任してきました。ここ20年ほどは医療的ケアを必要とする子どもが徐々に増え、小高での基礎的な身体づくりが学びの土台となることを実感しています。小低での3年間でしっかりと身体づくりができる、高学年では安定して登校できる子が多くなります。そして学校のリズムもでき、それぞれが担任との信頼関係を基盤として、友だちのしていることが気になります。私は、高学年の3年間は、障害の重い子も、友だちの中で活動する居心地の良さを学ぶことを大切にしたいと思って実践しています。

◆言葉はあるけど…

クリッとした目がかわいいあずちゃんを担任したのは5年生の時でした。あずちゃんは気管切開で人工呼吸器を装着していました。当時お母さんが常に教室待機をし、吸引回数も多くSpO₂*の値も90ギリギリで、80台になると酸素を足して下さる状況でした。

あずちゃんは、呼吸器をつけながらも「はい」「あがとうござります」「どうじょ」「おわり」など器用に言葉を発すること

ができました。理解言語が多く言葉を増やすことが課題でしたが、大人の促しがないと言葉を発しません。私は、あずちゃんの言葉が子どもらしくないのが気になりました。あずちゃんは大人から教え込まれて覚えた言葉を発しているだけなのではないかと疑問をもっていました。

◆「くだらなさ」を楽しむ

私は、子どもの答えがまちがっているときに「ブブブ」と大きな×を描いて見せたり、突拍子もない答えのときに「ズコッ」と転んでみたりと、子どもとの関わりにおいて少し大げさに振る舞うようにしています。

このことがあずちゃんの心に刺さりました。朝の会などで私が友だちに問いかけていると、答えをまちがえた時に、ヨコから「ブブブ」と声が聞こえます。「あずちゃんがブブブって言ったね」と話しかけると、いたずらな笑みを浮かべます。自分が失敗したときにはシユンとしているのに、他人の失敗は蜜の味なのです。この「ブブブ」は他の友だちにもヒットし質問の後、教室中に「ブブブ」が響くようになりました。授業の中でまちがうことも楽しくなります。

*体内のヘモグロビンと結合した酸素の割合をパーセントで示したもの

ソーシャルワークって なんだろう？

一度しかない生活を支え、人生に寄り添い、

かけがえのない生命を共に輝かせるために

第7回

ソーシャルワークと ソーシャルアクション



日本福祉大学

木全和巳

きまた かずみ／日本福祉大学社会福祉学部。児童養護施設、知的障害児施設等を経て現職。研究テーマはソーシャルワーク、セクシュアリティ、権利保障など。著書に『〈しょうがい〉と〈セクシュアリティ〉の相談と支援』（クリエイツかもがわ）など

ソーシャルアクションについて学び合う時の生きた教材

日本福祉大学には、公費助成推進会議という全学の会議体があります。「公費助成の大幅増額と民主的な公費助成制度を実現する運動を推進すること」を目的としています。この会議体は、教職員組合、学生会、院生自治会、生活協同組合、教授会、理事会で構成されています。教職員組合という労働組合が中心となって活動してきました。議長は労働組合からの選出です。私は、この7年間は、社会福祉学部から選出された国庫助成推進委員です。1973年からこの会議体は活動しています。もう50年を超えます。毎年毎年、コツコツと署名活動が続けてきました。こうした全学の会議体が残っている大学は、もう福祉大くらいでしょうか。

生協は保護者の方々にも商品の宣伝のパンフレットと共に、返信用封筒もつけて、署信用紙を送っています。保護者の方々からは、「日本福祉大学の理念であるすべての人たちに学ぶ機会を与えるためにも学生の学費負担の軽減はとても重要で改善すべき点だと思う」「このような署名を大学が先頭に立ってやってくださりありがとうございます」「一日も早く学費が安く希望する子が誰でも学べる国になってほしい」などなど、家族の名前なども書かれた署信用紙と共にこうした声が寄せられています。一つひとつは「小さな声」ですが、どれもとても重みのあるねがいです。

秋、国会請願に向けて署名活動が始まると、教授会の最後に、この署名のとりくみのおねがいの発言をさせてもらって



います。昨年は、こんな趣旨の発言をしました。「わたしたちの学部はソーシャルワークを学び合う学部です。ソーシャルワーク実践の領域の一つにソーシャルアクションがあります。この署名活動は、学生たちとソーシャルアクションについて学び合う時の生きた教材です。なぜ日本の私学の学費はこんなにも高いのか？ 大講義が多いのか？ など、学生たちと対話的な学び合いをしつつ、署名活動を広げてくださ」と。私自身も、学生たちと日本国憲法第16条に書かれた請願権を学び合う良い機会だと捉えています。国の強圧的な大学政策のなか、不振の学生募集の対応、国家試験対策に追われるソーシャルワーカー教育、学内の仕事の多さで研究ができないなどたくさんの課題が山積しています。でも、教授会で署名のおねがいも兼ねてこんな発言ができるまだまだ素敵な大学です。

ソーシャルワーク実践におけるソーシャルアクション

ソーシャルアクションというカタカナ言葉。この言葉もわかりやすく説明することがむずかしい言葉の一つです。手元にある『社会福祉事典』（大月書店、2002）には、「地域住民や当事者のニーズを充足するために、広く世論に訴えながら国や地方自治体など行政や司法機関などにはたらきかけ、環境や法律、制度、サービスの拡充、創設を求めて行う組織的な活動」と書かれています。「社会福祉関係者や市民団体、住民組織などが社会的発言力の弱い当事者に代わって活動を展開したり、当事者自身が主体的に活動したり、また

当事者と関係者が連帯して活動をすすめるなど様々な活動形態がある」とも。日本での例として、「原水爆禁止運動、朝日訴訟支援、保育運動、公害反対運動、被害の被害者への支援運動など様々な活動」があげられていました。一見古く見えますが、現在でも課題が解決されず、続いている社会運動ですね。グローバル定義には、「ソーシャルワークは、生活課題に取り組みウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかける」と書かれています。

一人ひとりに根気よく対話と学びを重ねながら

ソーシャルアクションという活動の一つに冒頭で取り上げたような署名活動があります。私の地元愛知では、「子どもたちにもう一人保育士を！」という運動が続けられています。2022年1月に保育士の配置基準改善を求める実行委員会が立ち上がり、全国に広がり、76年ぶりに4・5歳児クラスの国の基準が改定されました。この運動は、愛知から始まり、全国に共感をもつて広がっていきました。

この運動を紹介した新聞記事には、「現場の窮状を保育士らへのアンケートで募った際は、集まったエピソードを絵の得意な保育士が4コマ漫画やイラストにして、SNSで発信」するなど、「知らない人に分かりやすく伝える取り組み」とともに、共に活動を大切にすることの重要性を次のように書いています。「今回の運動のもう一つの特徴が、公立・民間の保育士と保護者が一緒に活動したことだ。立場の多様さは、運動を進める力になった。公立保育園の保育士など自治



障害者自立支援法違憲訴訟 基本合意15年

記念フォーラム成功の意味と課題

障害者自立支援法違憲訴訟の積極的和解となった「基本合意」から15年。6月2日、「尊厳ある暮らしをめざして！基本合意のこれまでとこれから」とした記念フォーラムが開催されました。満員となった永田町・星陵会館ホールとオンラインで参加者は800人を超えました。

オープニング上映「基本合意の誕生と今日まで」に続いて竹下義樹弁護士団長が開会あいさつ。厚労省とこども家庭庁の各政務官による後援あいさつが続き、藤岡毅弁護士団事務局長の「基調報告」、厚労省障害保健福祉部長、こども家庭庁官房審議官「特別報告」の後、原告5人の思いが切々と語られました。

後半のパネルディスカッションでは、「この15年で“表層”は変わったけれど“深層”は変わっていない。どうやったら深部を変えられるか」と藤井克徳「めざす会」世話人のコーディネートで6人のパネリスト報告と育成会連合会、精神保健福祉会連合会から指定発言があり、討論が深められました。

参加者の感想には「違憲訴訟では対立関係にあった国と原告が、基本合意を始点とし、同じ時間と場所において基本合意に立ち返って現状を報告・検証したり、今後について意見を述べ合うという経緯には、訴訟や基本合意にまさるとも劣らない重要なとりくみと感じました」の声もありました。



記念フォーラムの成果

はじめて厚労省とこども家庭庁が後援団体となり、「基本合意」の意義が再確認されました。また「あいさつ」「特別報告」「パネルディスカッション」では両省庁の課長により「基本合意」実現にむけた課題が共有されました。

今回スポットが当てられたのは、「障害児の利用料負担」の問題です。「自己責任と家族依存からの脱却をめざして」をテーマとしたパネルディスカッションでは、こどももんなか障害児福祉を望む親の会代表の中西美穂さん、江戸川区副区長の船崎まみさんが所得制限の撤廃、障害児の子育てと仕事の両立の困難と公的支援の必要性などを語りました。原告の家平悟さんは配偶者や障害児の親など「家族責任」は終わっていない。弁護士団の坂本千花さんは自立支援医療、精神障害者の人権保障、福祉サービスの商品化・契約制度の懸念などを表明しました。



おにの家は…

埼玉おにつこハウス 松村理香

発酵を止めていない、生きて
いる味噌づくりからスタートし
て38年。寒仕込みのおにつこ味
噌は、冬の間、日の出前からお
いしいお味噌を仕込みます。

日本一暑い街。熊谷で自然と
共に林の中で育てる平飼いの鶏
は1700羽。365日、毎日
生みたての卵を大切に拾います。
自慢のお味噌と地卵を使った
レストラン「おにつこハウス」。
ランチタイムは満席でお客様が
いっぱい。直売所には地域の新
鮮野菜、お味噌に地卵が並びま
す。「卵を一つずつ拾い、ていね
いに拭くなかま」「レストラン
で、笑顔で接客するなかま」「お
味噌をきれいに詰めるなかま」
一人ひとりが得意分野で、そ
の力を存分に発揮しています。

